

2. 人文学部

I	人文学部の研究目的と特徴	・ ・ ・ ・ ・	2	—	2
II	「研究の水準」の分析・判定	・ ・ ・ ・ ・	2	—	3
	分析項目 I	研究活動の状況	・ ・ ・ ・ ・	2	— 3
	分析項目 II	研究成果の状況	・ ・ ・ ・ ・	2	— 1 1
III	「質の向上度」の分析	・ ・ ・ ・ ・	2	—	1 3

I 人文学部の研究目的と特徴

1 新潟大学人文学部は、わが国日本海側最大の都市における大規模総合大学である新潟大学において、唯一の人文系学部であり、周辺大学に比しても豊富かつ多様な人材を擁していることから、人文科学の研究拠点として学内外からの期待が大である。よって本学部は、世界水準の基礎研究を基盤としつつ、分野横断的で創造的な特徴ある先端的研究を推進し、地域社会ひいては世界規模の諸課題の解決に、人間と文化・社会の探求の側面から貢献していくことを目的とする。

これは、新潟大学の中期目標における「研究の自由を担保し、多様な基礎的研究を土台として、分野横断的・創造的な特徴ある先端的研究を推進する」という点を、人文科学分野において実現するものである。

2 上記目的を達成するため、①人間行動研究、②テキスト論研究、③環東アジア研究、④比較メディア研究、の4つの重点研究分野を定める。これは学部構成員の研究の蓄積や強みに基づいたものであり、また③環東アジア研究が、新潟大学中期目標に「大学での実績と社会からの要請に基づいて、特徴ある最先端の研究を推進する」一例として挙げられた「アジア研究」に対応するなど、大学の立地と社会の要請に応じたものである。

3 人文科学研究の多くは個人研究であるが、他方で学際的分野横断的かつ国際的な研究を推進するため、また互いに切磋琢磨し研究力量を向上させるためには、開かれた環境での研究交流が重要である。よって本学部では、上記4つの重点研究分野ごとに複数の研究プロジェクトを立ち上げ、全教員がそのいずれかに参加して共同研究を推進している。

4 新潟大学が研究高度化のため全学レベルで設置した超域学術院のプロジェクトや、コアステーションに、人文科学分野において積極的に参画し、さらにこれらの活動を、上記3で述べた学部の研究プロジェクトと緊密に連動させ、より一層の研究高度化をめざしている。

[想定する関係者とその期待]

新潟大学人文学部の構成員は、人文科学の多様な分野を網羅しており、伝統的な領域を維持する一方、新たな領域の開拓も積極的に行っている。したがって人文科学のあらゆる分野の内外の研究者を、関係者として想定することができ、学問の発展にむけて寄せられる期待も大きい。

とりわけ環東アジア研究など、国際研究交流の経験に裏打ちされて、東アジアをはじめとした諸外国の研究者からは、本学部との研究交流に大きな期待が寄せられている。

一方、地域社会における学術文化の拠点であることから、地域社会の一般市民もまた関係者として想定される。とりわけ首都圏等に比べ人文系研究機関が少ない新潟県においては、高度な学術上の知見を享受するのみならず、文化面からの地域振興のためにも、本学部の研究力に対する期待が大である。

II 「研究の水準」の分析・判定

分析項目 I 研究活動の状況

観点 研究活動の状況

(観点に係る状況)

本学部の研究活動は、共同研究と個人研究に大別できる。前者は①人間行動研究、②テキスト論研究、③環東アジア研究、④比較メディア研究、の4つの重点研究分野ごとに設けられたプロジェクトを基本としている。後者は学部構成員が個人単位で専門分野に即して行う研究である。この両者は、共同研究での知見を個人研究に活かすなど、相互に関連している。

(1) 研究活動の状況

上記4つの重点研究領域ごとに10の研究プロジェクトを組織し、共同研究を進めている(資料1)。学部教員は専門分野に応じ必ずいずれかのプロジェクトに参加し、プロジェクトによっては他学部教員・大学院生等の協力者を加えている。

プロジェクトの研究活動については、学部紀要『人文科学研究』誌上に毎年概報を掲載するほか、定期的に「プロジェクト特集」を組み、成果発表に充てている(資料2)。一方で大学院現代社会文化研究科において、博士後期課程学生の研究指導のために組織される研究プロジェクトは、本学部の研究プロジェクトと密接な関連を持っているものが多く、これら現代社会文化研究科プロジェクトの定期刊行物は、本学部教員の研究成果の発表媒体の一環をなしている(資料3)。その他、本学部教員が編集発行に関与する学術雑誌が多くあり、本学部教員の旺盛な研究活動の成果を掲載している(資料4)。

学部の研究プロジェクトを支援するため、第1期中期目標期間に引き続き、研究推進費(高額設備などの購入)、研究プロジェクト支援経費(学外研究者の招聘など)を学部共通経費の中に設け、共同研究の充実を図った。

これら研究プロジェクトは、メンバー相互の研究会、外部研究者を招いた講演会・シンポジウムなど、大小さまざまな企画を行っているが、これらは学部内外にアナウンスされ基本的に公開のものとして開催されている(資料5)。

プロジェクト研究と相互に影響を与えつつ、個人単位の研究活動も活発に行われている。『人文科学研究』や資料3・4であげた学術誌から、権威ある査読付きの国内・国際学術雑誌に至るまで、多様な媒体でその研究活動は発信され続けている(資料6)。

資料1 人文学部の研究プロジェクト一覧

研究領域	プロジェクト名	教員数
①人間行動研究	(1) ヒト認知系の総合的研究	5
	(2) 言語類型論の記述的・理論的研究	9
②比較メディア研究	(3) 新たな「公共圏」モデルの構築	9
	(4) 文化史・文化理論の再構築	8
③テキスト論研究	(5) 世界の視点をめぐる思想史的研究	6
	(6) 〈声〉とテキスト論	12
	(7) 19世紀学研究	3
④環東アジア地域研究	(8) 環東アジア地域のネットワークに関する総合的研究	8
	(9) 佐渡・越後の文化交流史	10
	(10) 地域映像アーカイブ	7

(注) 教員数は平成27年度のもの。

資料2 『人文科学研究』のプロジェクト特集号

号数（刊行年月）	プロジェクト名（掲載論文数）
第128輯（平成23年3月）	〈声〉とテキスト論（4）
第130輯（平成24年3月）	〈声〉とテキスト論（1）
第134輯（平成26年3月）	〈声〉とテキスト論（4）
第136輯（平成27年3月）	〈声〉とテキスト論（4） 地域映像アーカイブ（4）
第138輯（平成28年3月）	〈声〉とテキスト論（5）

（注） 出典：『人文科学研究』（ISSN0447-7332）各号。論文数にはプロジェクト代表者による趣旨説明短文を含まないが、プロジェクト主催国際シンポジウム参加の海外研究者によるものを含む。

資料3 大学院現代社会文化研究科プロジェクト報告書（定期刊行物）のうち人文学部教員が携わっているもの

誌名（ISSN）	対応する人文学部のプロジェクト
世界の視点，知のトポス（1349-8576）	世界の視点をめぐる思想史的研究
比較宗教思想研究（1348-0057）	世界の視点をめぐる思想史的研究
言語の普遍性と個別性（1884-863X）	語類型論の記述的・理論的研究
欧米の言語・社会・文化（1348-0065）	言語類型論の記述的・理論的研究／〈声〉とテキスト論
フランス文化研究（1882-6784）	言語類型論の記述的・理論的研究／〈声〉とテキスト論
表現文化研究（1349-8576）	文化史・文化理論の再構築
環日本海研究年報（1347-8818）	環東アジア地域のネットワークに関する総合的研究
佐渡・越後文化交流史研究（1348-0073）	佐渡・越後の文化交流史研究
資料学研究（1349-1253）	環東アジア地域のネットワークに関する総合的研究 ／佐渡・越後の文化交流史研究

資料4 人文学部構成員が編集・発行に関与している学術雑誌

誌名	学会・研究会名（発行主体）	刊行	ISSN
新潟史学	新潟史学会	年2回	0287-4946
新潟大学国語国文学会誌	新潟大学人文学部国語国文学会	年刊	0916-1953
東アジア—歴史と文化—	新潟大学東アジア学会	年刊	0344-106X
新潟大学英文学会誌	新潟大学英文学会	不定期	
新潟心理学会報	新潟心理学会	年刊	
西北出土文献研究	西北出土文献研究会	年刊	1349-0338
災害・復興と資料	新潟大学災害・復興科学研究所危機管理・災害復興分野	年刊	2186-5930

資料5 研究プロジェクトによる研究会（公開）・講演会・シンポジウム等の開催実績

	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
プロジェクト数	9	7	8	8	7	7
開催回数	26	24	35	37	22	32

（注） 出典：『人文科学研究』第129, 131, 134, 135, 137輯の「人文学部研究プロジェクト短信」欄ほか。

資料6 人文学部教員による研究成果発表数

	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
著書 (うち単著)	37 (14)	75 (7)	50 (6)	57 (7)	36 (4)	16 (1)
論文	72	75	65	75	72	78
研究発表	35	55	61	73	84	48
教員数	67	65	63	63	65	66

(注) 出典：『自己点検・自己評価報告書－新潟大学人文学部の現状と展望 VI－(2006～2011年度分)』、「新潟大学研究者総覧」(<http://researchers.adm.niigata-u.ac.jp/>)等による。研究発表は、2014年度以前退職者について個別データがないため参考値である。

(2) 研究の高度化

高度な研究の拠点として全学措置で設置された新潟大学コアステーションには、人文学部教員が中心となり、既述の学部内研究プロジェクトを基盤として申請し認定されたものが多く、第1期中期目標期間に設置済みの2件に加えて合計8件となり、4倍になった(資料7)。この数は、新潟大学の文系コアステーション総数10(平成27年4月現在)の80%を占める。これらのコアステーションは、『環東アジア研究』『19世紀学研究』『にいがた地域映像アーカイブ』などの定期刊行物を編集刊行している。

一方、全学的な先端研究の拠点である超域学術院の研究プロジェクトにも、多くの人文学部教員が関わっていたが、事業年度の終了に伴いその数自体は減少した(資料8)。しかし終了プロジェクトの多くがコアステーションに研究の場を移しており、人文学部教員の研究高度化への歩みは着実に引き継がれている。

資料7 人文学部教員が主として関わる新潟大学コアステーション

設置主体	コアステーション名称 (代表者)	対応する人文学部 研究プロジェクト	認定年度
人文社会教育科学系	環東アジア研究センター (關尾史郎)	環東アジア地域のネットワークに関する総合的研究	平成17年度～
人文社会教育科学系	Institute for the Study of the 19th Century Scholarship (桑原聡)	19世紀学研究	平成18年度～
人文社会教育科学系	地域映像アーカイブセンター (原田健一)	地域映像アーカイブ	平成24年度～
人文社会教育科学系	間主観的感性論研究推進センター (栗原隆)	世界の視点をめぐる思想史的研究	平成24年度～
人文社会教育科学系	言語科学研究センター (秋孝道)	言語類型論の記述的・理論的研究	平成24年度～
人文社会教育科学系	〈声〉とテキスト論研究センター (鈴木正美)	〈声〉とテキスト論	平成24年度～
人文学部	地域文化連携センター (栗原隆)	※	
人文学部	越佐・新潟学推進センター (池田哲夫)	佐渡・越後の文化交流史	

(注) 地域文化連携センターについては、人文学部の教育研究全般に関わる社会貢献を対象とするため、個別の研究プロジェクトとは対応しない。

学部附置の両センターは、教育・研究・社会貢献の統合的推進を目的としたものである。

資料8 人文学部教員が関わる新潟大学超域学術院研究プロジェクト

プロジェクト名（代表者名）	実施年度	教員数
19世紀学ーヘレニズムからみた変革と教養の世紀ー（*）	平成17～22年度	2
東部ユーラシア周縁世界の文化システムに関する資料学的研究（關尾史郎）	平成19～25年度	8
チンギス・ハンの実像と現代的意義の研究（白石典之）	平成24年度～	2

（注） *印は当初人文学部教員が代表者であったが後に交代したもの。教員数は代表者・分担者のうち人文学部教員の数。

（3）研究交流と国際化

人文学部が部局間協定として結んだ学術交流協定は、平成21年度末までに19件であったが、平成22年度以降あらたに11の大学・学部と協定を締結した（資料9）。これらの大学を中心として、学部内のプロジェクトが主体となって海外から研究者を招聘し、また海外へ研究者を派遣して開催された各種国際学術イベントは、平成22年度以降の6年間で36件に及ぶ（資料10）。第1期中期目標期間中の同種イベントが年に2～3件であったことと比較して、顕著な伸びである。その他個々の教員が主催に加わった国際シンポジウム等も数多い。

国内大学に関しては、平成20年に愛媛大学法文学部と学術交流協定を結び、着実に研究交流を進めてきたが、平成22年度末に開催した学術講演会をもとにして、平成24年に『人文学の現在（いま）』を両大学で共同出版し、同書は全国学校図書館協議会選定図書に採択された。同大学との定期的な研究交流の傍ら、平成24年度に岩手大学人文社会科学部と学術交流協定を締結、平成26年度には愛媛大学と岩手大学との協定締結も実現し、3大学交流の輪が完成したことを記念して、本学部主催で記念シンポジウムを開催した（資料11）。

資料9 学術交流協定締結校一覧（平成22年度以降）

年月	締結校（所在地）
平成22年4月	復旦大学中国語学部（中国・上海）
平成22年5月	中国人民大学国学院（中国・北京）
平成22年12月	復旦大学歴史学部（中国・上海）
平成23年7月	サンクト・ペテルブルグ国立大学（ロシア・サンクトペテルブルグ）
平成24年8月	ルール大学ボッフム東アジア学部（ドイツ・ボッフム）
平成25年3月	天津外国語大学日本語学院（中国・天津）
平成25年7月	北東連邦大学地域言語学部（ロシア・ヤクーツク）
平成25年8月	首都師範大学歴史学院（中国・北京）
平成25年10月	翰林大学校人文大学（韓国・春川）
平成26年7月	パリ第13大学（フランス・パリ）
平成27年6月	ニューヨーク州立大学フレドニア校（アメリカ合衆国・フレドニア）

資料10 国際シンポジウム・ワークショップ等の開催状況

開催主体	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
学部プロジェクト主催	6	6	7	9	5	4
その他	—	2	2	1	5	3

（注） 内容詳細は別掲付表1（2-14頁）、付表2（2-16頁）による。「その他」は学部教員が独自に主催に関わったもの。

資料 11 愛媛大学法文学部・岩手大学人文社会学部との交流事業の記録

開催年月日	事業名称等
平成 22 年 3 月 13 日*	学術講演会「人文学の現在」(於愛媛大学)
平成 23 年 1 月 28 日	学術講演会「遍路と巡礼」(於新潟大学)
平成 23 年 9 月 24 日	学術講演会「人文学の現在 2011」(於愛媛大学)
平成 24 年 11 月 12 日	学術講演会「戦争記念碑が語り継ぐアメリカ」「始皇帝と里耶秦簡」(於新潟大学)
平成 25 年 3 月 13 日	学術講演会「災害への対応と地域コミュニティ」「南アフリカ共和国のワイン産業」
平成 25 年 12 月 21 日	学術講演会「太鼓から Taiko へ」「朝鮮詠と郷土」「顔の表象文化史序説」「Looking away to go」(於愛媛大学)
平成 26 年 11 月 29 日	三大学交流公開シンポジウム「地域から見る日本古代」(於新潟大学)
平成 27 年 3 月 20 日	学術講演会「哲学と大学, 学問」(於愛媛大学)

(注) *は第 2 期中期計画期間以前の事業だがその後の出版との関係で記述した。

(4) 全国学会等の開催

本学部教員が主催・運営担当者となって、全国規模の学会の総会・大会が数多く新潟大学で開催されている(資料 12)。本学部教員の力量が評価され、当該分野の研究拠点のひとつとみなされていることを示している。

資料 12 本学部教員が主催に関わって実施された国際・全国学会

名称	開催年月日	備考(開催会場等)
歴史地理学会第 55 回大会	平成 22 年 5 月 11~13 日	新潟大学五十嵐キャンパス
日本 18 世紀学会・第 32 回大会	平成 22 年 6 月 26~27 日	新潟大学旭町キャンパス
日本カント協会 第 35 回学会	平成 22 年 11 月 13 日	新潟大学五十嵐キャンパス
日本都市社会学会第 29 回大会	平成 23 年 9 月 7~8 日	新潟大学五十嵐キャンパス
日本英語学会第 29 回大会	平成 23 年 11 月 12~13 日	新潟大学五十嵐キャンパス
シェリング協会 第 22 回総会・大会	平成 25 年 7 月 6~7 日	新潟大学駅南キャンパス ときめいと
日本民俗学会第 65 回年会	平成 25 年 10 月 12~14 日	新潟大学五十嵐キャンパス
表象文化論学会第 9 回研究発表集 会および関連企画	平成 26 年 11 月 8~9 日	新潟大学五十嵐キャンパス 他
日本モンゴル学会・平成 27 年度春季 大会	平成 27 年 5 月 16 日	新潟大学駅南キャンパス ときめいと
日本独文学会北陸支部 2015 年度研究 発表会	平成 27 年 11 月 14 日	新潟大学駅南キャンパス ときめいと

(5) 研究成果の社会への還元

第 1 期中期目標期間から継続して、一般書としての人文選書、学術専門書としての研究叢書の刊行を続けているほか、高大連携も視野に入れ、主に高校生を対象として人文学の研究成果を平易に綴る「人文ブックレット」の刊行を開始した(資料 13)。

また、平成 26 年度からは、市内中心部のサテライトキャンパスにおいて、一般市民を対象に研究の最前線を平易に語る「人文カフェ」を開始するなど、研究成果の社会への還元
の新たな地平を開拓しつつある(資料 14)。

資料 13 人文選書・研究叢書・人文ブックレット等の刊行状況

区分	書名（副題略）	刊行年月
新大人文選書（高志書院）	關尾史郎『もうひとつの敦煌』 高木 裕『詩のテキストと〈声〉』	平成 23 年 3 月 平成 24 年 3 月
新潟大学人文学部研究叢書（知泉書館）	大石 強『英語の語彙システムと統語現象』 吉田治代『プロッホと「多元的宇宙」』 芳井研一編『南満州鉄道沿線の社会変容』 城戸 淳『理性の深淵』 關尾史郎編『環東アジア地域の歴史と「情報」』 阿部昭典『縄文の儀器と世界観』 馬場（橋谷）英子『語りによる越後小国の昔ばなし』	平成 23 年 3 月 平成 23 年 3 月 平成 25 年 3 月 平成 26 年 3 月 平成 26 年 3 月 平成 27 年 3 月 平成 28 年 3 月
人文ブックレット	工藤信雄『実験を通して「心」のはたらきを考えよう！』 廣部俊也『「男」にこだわって見た江戸文学』 中村隆志『ケータイ・コミュニケーションと公共空間の変貌』 井山弘幸『幽霊について科学的に考えよう』 市橋孝道『イギリス 2012 年をふりかえる』 栗原隆『昔話から読み解く人間学』	平成 23 年 3 月 平成 23 年 3 月 平成 23 年 12 月 平成 24 年 12 月 平成 26 年 2 月 平成 27 年 2 月
その他	新潟大学人文学部・愛媛大学法文学部共編『人文学の現在（いま）』（創風社出版）	平成 24 年 3 月

資料 14 人文カフェ開催状況

	開催日	演題
第 1 回	平成 26 年 10 月 4 日	栗原隆「人生は顔に現れる」 松井克浩「災害からの復興と『感情』のゆくえ」
第 2 回	平成 26 年 10 月 25 日	福島治「共感と援助の動機は何によって引き起こされるのか?!」 鈴木光太郎「なぜ愛しいものを左で抱くのか」
第 3 回	平成 26 年 11 月 15 日	細田あや子「異時空間を交錯するキリストの身体」 廣部俊也「感性を拡大する機構としての画題・修辞・もじり」
第 4 回	平成 26 年 12 月 6 日	江畑冬生「人間言語の仕組みと働きについて客観的に捉える」 井山弘幸『『知識の社会史』の可能性について』
第 5 回	平成 27 年 10 月 11 日	栗原隆「新潟から考える環境倫理」「秋山郷の文化的景観－鈴木牧之の『秋山紀行』を読み解く－」
第 6 回	平成 27 年 10 月 18 日	堀健彦「幕末期佐渡人の描いた世界－新発田収蔵の蘭学と絵図－」「鉾山都市相川の文化的景観」
第 7 回	平成 27 年 11 月 8 日	橋本博文「旧石器・縄文時代の佐渡と文化の交流史」「弥生時代佐渡の文化交流史」
第 8 回	平成 27 年 11 月 15 日	池田哲夫「佐渡の能楽史からみた文化交流史－能舞台を中心として－」「佐渡の民俗芸能と鉾山文化」
第 9 回	平成 27 年 12 月 6 日	飯島康夫「佐渡・越後の獅子舞」 井山弘幸「新潟が生んだ科学者」

(6) 競争的資金等の獲得

科学研究費補助金については、毎年説明会を開催して申請・採択の増加を図ると同時に、学部内に連絡調整専門部会を設けて申請書作成のアドバイス等を行う体制を引き続き維持

した。この結果、上下はあるものの、恒常的に 50～60%の教員が申請を行い、年度によっては 40%近くの採択率となるなど、概ね水準が向上した。また基盤研究 (A) (B) など大型の種目に積極的に挑戦して採択を得ていることもあり、新規採択額総計を比較すると、600 万円から 1500 万円程度の年度が多かった第 1 期中期目標期間に比して、ひとランク上の数値となっている (資料 15・16)。また科研費以外の各種研究助成についても、この間積極的に申請し獲得件数が増えている (資料 17)。

学内の競争的資金である学長裁量経費等の採択も引き続き好調であった (資料 18)。また学部内では、第 1 期中期目標期間に引き続き、寄付金を運用して「新潟大学人文科学奨励賞 阿部賞」を選考し、顕著な研究業績に対して奨励金を授与している (資料 19)。

資料 15 科学研究費補助金採択状況 (平成 28 年 3 月現在)

年度	新規申請数	新規採択数	新規申請率	新規採択率	新規採択額
平成 22 年度	36	14	51.4%	38.9%	13,390 千円
平成 23 年度	39	11	57.4%	28.2%	21,800 千円
平成 24 年度	45	17	68.2%	37.8%	24,100 千円
平成 25 年度	34	10	51.5%	29.4%	15,900 千円
平成 26 年度	37	12	56.9%	35.1%	19,400 千円
平成 27 年度	35	11	53.0%	31.4%	19,600 千円

(注) 申請率は専任教員数に対する比率。新規採択額は初年度の直接経費の合計。申請・採択数には研究生活スタート支援・研究成果公開促進費を含む。

資料 16 科学研究費補助金採択状況 (種目別)

種目	22 年度	23 年度	24 年度	25 年度	26 年度	27 年度
新学術領域研究	0 (0)	0 (1)	0 (0)	0 (1)	0 (1)	0 (0)
特別推進研究	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
基盤研究 (S)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
基盤研究 (A)	0 (2)	1 (1)	0 (0)	1 (2)	0 (1)	1 (1)
基盤研究 (B)	0 (3)	0 (6)	1 (5)	0 (2)	0 (2)	1 (6)
基盤研究 (C)	7 (20)	8 (22)	13 (32)	5 (22)	7 (23)	6 (21)
挑戦的萌芽研究	1 (4)	1 (6)	0 (3)	1 (5)	3 (5)	1 (3)
若手研究 (A)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (2)	0 (0)
若手研究 (B)	3 (3)	1 (2)	0 (1)	1 (1)	0 (1)	0 (0)
研究活動スタート支援	1 (1)	0 (0)	0 (0)	2 (2)	0 (0)	0 (0)
研究成果公開促進費	2 (3)	0 (1)	1 (1)	0 (1)	0 (1)	0 (0)

(注) 括弧内は申請数。

資料 17 科学研究費補助金以外の研究助成獲得状況

研究課題 (代表者)	財団・機構名等	種目	年度
新潟—2011 地域アーカイブ・イン・パリに伴う旅費支給 (原田健一)	国際交流基金	国際交流基金助成金	平成 23 年
「ポスト福島第一原発事故における地域コミュニティの持続的「発展」「再生」の可能性」における研究助成 (渡邊登)	トヨタ財団	トヨタ財団研究助成プログラム	平成 24～25 年
新潟水俣病を伝える人材育成プログラム (渡邊登)	新潟県	新潟水俣病関連情報発信事業補助金 (新潟県)	平成 24～26 年
現代イスラームの医療と生命倫理の文献学的研究 (青柳かおる)	三菱財団	三菱財団人文科学研究助成	平成 24 年

「ケータイを活用した対面コミュニケーションの国際比較」に対する研究助成（中村隆志）	公益財団法人電気通信普及財団	公募型研究助成金	平成 25 年
縄文中期後半期における土偶衰退・消滅現象の意義（阿部昭典）	公益財団法人高梨学術奨励基金	公募型研究助成金	平成 25 年
「村コミュニティの映像情報のデジタル化による共有化と共同利用の研究」に対する助成（原田健一）	公益財団法人電気通信普及財団	公募型研究助成金	平成 25 年
地域映像アーカイブ（原田健一）	日本放送協会	研究の助成（NHK 地域文化賞）	平成 25 年
イスラームの生命倫理における生殖補助医療—スンナ派とシーア派の比較研究（青柳かおる）	公益財団法人上廣倫理財団	平成 26 年度上廣倫理財団研究助成金	平成 26～27 年
ウェアラブル端末：非言語行動と社会的承認（中村隆志）	公益財団法人 KDDI 財団	公益財団法人 KDDI 財団調査研究助成	平成 27～29 年
外国人留学生における国際報道の受容とメディア利用の意識調査（中村隆志）	公益財団法人放送文化基金	公益財団法人放送文化基金人文社会・文化助成	平成 27 年

資料 18 学長裁量経費・学系長裁量経費採択状況

費目		平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度
学長裁量 経費	助成研究	2 (4,800)		2 (5,700)	2 (2,280)	2 (2,394)
	奨励研究	1 (615)	1 (438)	1 (223)	2 (830)	
	発芽研究	1 (600)			1 (360)	
	災害特別		2 (2,225)			
	科研費応募支援	4 (2,600)	4 (1,750)	1 (250)	3 (474)	1 (1,000)
学系長 裁量経費	学系基幹研究	5 (5,900)	5 (5,700)	5 (6,100)	3 (4,100)	3 (1,500)
	学系奨励研究	2 (860)		1 (440)	3 (1,380)	2 (550)

（注）括弧内は合計額（単位：千円）。平成 27 年度は当該経費の募集なし。

資料 19 「新潟大学人文科学奨励賞 阿部賞」受賞者一覧

年度	受賞者	受賞業績
平成 22 年度	細田あや子	著書『「よきサマリア人」の譬え 図像解釈からみるイエスの言葉』の刊行
平成 23 年度	橋谷英子	著書『浙江省舟山の人の形芝居——候家一座と「李三娘（白兔記）」』の刊行
平成 24 年度	錦 仁	著書『なぜ和歌を詠むのか——菅江真澄の旅と地誌』の刊行
平成 25 年度	番場 俊	著書『ドストエフスキーと小説の問い』の刊行
平成 26 年度	中本真人	著書『宮廷御神楽芸能史』の刊行
平成 27 年度	宮崎謙一	著書『絶対音感神話—科学で解き明かすほんとうの姿』の刊行

（水準）期待される水準を上回る

（判断理由）

本学部の研究活動は、学部内研究プロジェクトの活動を核としつつ、①期間内に新たに 4 つの分野でコアステーション化をはたすなど研究高度化の推進、②国際学術イベント数の倍増や国内三大学の交流協定締結など内外の研究機関との交流の積極的拡大、③人文カフェ等あらたな社会への還元の開拓、④科研費獲得総額の 30% 程度増加にみる競争的資金獲得の向上の諸点で、大きく活性化している。これら旺盛な研究活動が、次項で見る関係者の期待に応える成果に結びついている。

観点 大学共同利用機関、大学の共同利用・共同研究拠点に認定された附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の実施状況
--

該当なし

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

観点 研究成果の状況(大学共同利用機関、大学の共同利用・共同研究拠点に認定された附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の成果の状況を含めること。)

(観点に係る状況)

(1) 国際的水準に達している研究

人文学部におけるいくつかの研究は、国際的にみて極めて高い水準にあると評価されている。乳児期を対象とした発達心理学の研究は、世界初の発見を伴うもので、海外雑誌で特集が生まれ多くの招待講演が依頼された。モンゴル帝国の考古学的研究の代表者は、日本・モンゴル・中国のみならず国際的なこの分野の第一人者と目され、ケンブリッジ大学出版が刊行する国際的シリーズの考古学パートを担当することとなった。内陸アジアにおける出土文字資料の研究は各国語への翻訳や招待講演の依頼が多く国際的高水準にあることを示す。『百科全書』を中心とした18世紀ヨーロッパ啓蒙思想の研究も国際学会で高く評価され、フランス語圏での大学演習テキストにも採用された。

(2) 独創性や先端性が学界で高く評価されている研究

シェリングやヘーゲルを中心としたドイツ思想史の研究は独自の発想と旺盛な成果発表とが学界で高く評価され、大規模科研費を連続して獲得するなどに結実した。宮廷の神楽を中心とした古代中世芸能研究、ドストエフスキーを中心とした近代小説研究、北東ユーラシア言語の研究等は、いずれもその研究の質が高く評価され、関連の学会賞を受賞したものである。古代越後の地図とされていたものが後世の地理認識表現であることを明らかにした研究、聖書の譬えを中心とした宗教美術史研究、東アジア民間文学の比較研究、実験により絶対音感の弊害を実証した研究等は、内外の書評等で高く評価された卓越した研究である。

(3) 先端的な成果が社会貢献に直結する研究

確実な文献史料に基づき過去の地震を復原する研究は、理系の地震学との連携という文理融合の最先端に位置し、防災・減災という現代的課題と直結するものであるだけでなく、被災史料レスキュー活動などと結びつくという面でも、最先端の研究成果が社会貢献に直結する重要な事例である。地域に残された膨大な映像資料をアーカイブしつつ社会的記憶としての意義を探る地域映像アーカイブ研究は、地域貢献そのものを見すえた研究であり、頻繁に各種メディアで取りあげられるなどにより地域の人びとに大きな感銘を与えている。

(4) 研究成果に対する評価

平成24年度には学部として6度目の自己点検・評価を行い、これに基づいて、平成25年度には外部評価を実施した。評価委員からは、研究プロジェクト、コアステーションへの参加、外部資金獲得努力等に支えられた、上記のような卓越した研究成果が高く評価された(資料20)。

資料 20 平成 25 年度に実施した外部評価における委員の評価コメント

委員名	評価コメント（抜粋）
野家啓一（東北大学）	<p>4つの重点研究領域を定め、10のプロジェクトのいずれかへ教員の参加を求めていることは、優れた取り組みであり、その成果は科研費の採択率の向上にも結びついていると思われる。</p> <p>哲学・芸術学・心理学分野に関しては、各教員の著書・論文の発表数も多く、科研費等の外部資金獲得も順調であり、研究活動は活発に行われている。いずれも研究論文は国外および国内の有力学術誌に掲載されており、研究レベルは水準を上回っている。</p>
西中村浩（東京大学）	<p>「コアステーション」「超域研究機構」など学部を越えた研究体制が作られ、また人文学部の教員も「コアステーション」などで学内の研究組織や研究プロジェクトを立ち上げて共同研究を行うなど、研究体制はしっかりしていると思いますし、科研費取得のための支援や学内競争資金の設立など、研究遂行のためのインセンティブを与える仕組みもよく整えられていると思います。</p> <p>文学研究についてみる限り、個別の研究水準は高く、また「声とテキスト」など共同研究も大きな成果を挙げていると思います。研究の発信についても、国際的なものを含めたシンポジウムの開催も積極的に行われていますし、人文研究叢書、人文選書、人文ブックレットなどで、それぞれ専門家、一般の読者、そして高校生を対象をきちんと定め、それぞれにおいて研究成果発信が十分活発に行われています。</p>
南川高志（京都大学）	<p>恒常的な運営費交付金に基づく研究資金が充分でない中、外部資金を獲得する努力を重ねている。また、一人でも多く資金確保が実現するよう、きめ細やかな助成の配慮までしている。さらに、獲得した外部資金を用いて積極的に共同研究を展開している。これらの点は高く評価できる。</p> <p>史学分野の教員の方々は、高い水準で多大の研究成果をあげておられ、外部資金を獲得してプロジェクトを熱心に推進した点など、高く評価できる点である。</p>
吉原直樹（大妻女子大学）	<p>それぞれの教員が個別研究の成果を生かしながら、「コア・ステーション」と「超域研究機構」を二本柱とする大学全体の研究制度の下で、学内および学部内の研究プロジェクトに加わりながら確実に共同の研究成果をあげている。しかもそうした研究成果の社会への発信および地域への還元を意識的に取り組んでいる。この共同研究体制のモラルの高さには感服するばかりである。</p>

『外部評価報告書 一新潟大学人文学部の教育・研究（2006～2011年度）の検証一』（平成 26年 3月）より

（水準） 期待される水準を上回る
（判断理由）

前項でみた人文学部の活発な研究活動を前提として、その成果として公開された業績が、国内の学界のみならず、国際的にも一流の水準に達しているものとみなされるに至ったこと、研究成果の社会への還元においても、前項で述べた各種出版物やイベントだけでなく、最先端の研究成果が直接に社会にインパクトを与えるに至っていることから、本学部の研究成果は、国内外の関連学界や、地域社会の期待に、充分以上に応えるものになっていると判断される。

Ⅲ 「質の向上度」の分析

(1) 分析項目Ⅰ 研究活動の状況

第1期中期目標期間に2つであった人文学部研究プロジェクトを基盤とするコアセッションが、8つに大幅に増した(資料7)ことは、研究高度化にむけた本学部教員の取組が、客観的に評価されたことを示している。

学部内プロジェクトが主催する研究会等の開催頻度は、第1期中期目標期間では年平均13回程度であったものが、2～3倍と格段に増加している(資料5)。これはプロジェクトを核とした研究活動の活性化をめざし資金面等で積極的な支援をおこなった成果である。なかでも国際シンポジウム等の開催数は、第1期中期目標期間の年2～3回から年平均5回以上へと増加した(資料10)。また愛媛大学法文学部との学術交流は、第2期中期目標期間に入って発展し、岩手大学人文社会科学部も加えた三大学交流に結実した(資料11)。この大学間交流は、地方大学としての地域に立脚した研究発信という課題を追求する場であるのみならず、今後はフランス・中国等海外の大学も加えたコンソーシアムの構想が検討されており、さらなる発展が期待される。

競争的資金獲得の状況も改善している。科研費の申請率・採択率は数ポイント程度の向上であったが、新規採択額総計を比較すると、600万円から1500万円程度の年度が多かった第1期中期目標期間に比して、2000万円程度の年度が多くなっている(資料15)のに加え、第1期中期目標期間には期間全体で2件程度であった科研費以外の競争的資金について、各年3件ほどずつコンスタントに新規獲得をする等積極的になっている(資料17)。

これらの点はそれぞれ質の高い研究成果の増加に結びついている。

(2) 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

新潟大学と本学部が伝統的に担ってきた環東アジア地域研究等の分野においては、第1期中期目標期間にも国際的に高い評価をうける業績がみられたが、それらが継続しているのみならず、モンゴル研究者が世界的な学術書シリーズの刊行に加わるなど、より上のランクの第一人者としての国際的評価を得ることとなった。また、第1期中期目標期間にも個別に評価されていた発達心理学分野や18世紀啓蒙思想研究は、第2期中期目標期間になって海外での講演依頼が増加するなど、その国際的評価を確立したといえることができる。

同様に歴史地震研究、地域映像アーカイブ研究等については、第1期中期目標期間から取り組まれていたが、研究の進展に随いその先端性と社会貢献の意義が認識され、マスメディアでたびたび取りあげられるなどの大きな評価を得るに至った。

付表1 国際シンポジウム・ワークショップ等の開催状況（学部プロジェクトが主催・共催したもの）

名称	開催年月日	主催・共催したプロジェクト
ナント大学講演会（招待講演者高木裕）	平成22年9月22日	〈声〉とテキスト論
国際ワークショップ「日中戦争の深層」	平成22年11月13～14日	環東アジア地域のネットワークに関する総合的研究
人文学部講演会（チェンマイ大学ナターヤ・タナノン氏）	平成22年10月27日	新たな「公共圏」モデルの構築
人文学部講演会（ボルドー第3大学ジェローム・ロジェ氏）	平成22年12月10日	〈声〉とテキスト論
人文学部講演会（ソウル大学洪在星氏）	平成23年2月18日	言語類型の記述的・理論的研究
国際ワークショップ「塙画・壁画の環東アジア」	平成23年3月5日	環東アジア地域のネットワークに関する総合的研究
国際シンポジウム「〈声〉の制度－継承・障害・侵犯－」	平成23年9月16日	〈声〉とテキスト論
パリ日本館での展覧会と講演「新潟発・日本の発見－映像と記憶のアルケオロジー1865-2011」	平成23年10月17～21日	地域映像アーカイブ
国際ワークショップ「日中全面戦争と地域社会変容」	平成23年11月12～13日	環東アジア地域のネットワークに関する総合的研究
公開研究会「カント哲学の脱構築－『理性』と『意思』は近世主知主義を貫く原理であったか？－」	平成24年2月16日	世界の視点をめぐる思想史的研究
国際シンポジウム「ドイツ・ロマン派の時代の危機意識とユートピア」	平成24年2月28～29日	19世紀学研究
公開研究会「人間学の革新と再構築－『感応』と『情動』を介することで哲学的人間学の革新は可能か？－」	平成24年3月26日	世界の視点をめぐる思想史的研究
ボルドー第3大学国際シンポジウム「自己表現への障害」	平成24年9月11～12日	〈声〉とテキスト論
学術講演会（ビーレフェルト大学David Gilgen氏）	平成25年2月28日	19世紀学研究
国際シンポジウム「Über die Identität（同一性を超えて）」	平成25年3月2日	世界の視点をめぐる思想史的研究
国際シンポジウム「近代東北アジア史における境界」	平成25年3月2日	環東アジア地域のネットワークに関する総合的研究
国際シンポジウム「〈声〉の制度－継承・障害・侵犯－PART2」	平成25年3月8日	〈声〉とテキスト論
学術講演会（リセ・ルイ・ルグラン校フランソワ・ペパン氏）	平成25年3月8日	19世紀学研究
ケルン大学における公開研究会	平成25年3月13日	世界の視点をめぐる思想史的研究

公開研究会「サハ語とサハ文学」	平成 25 年 7 月 22 日	言語類型の記述的・理論的研究
国際シンポジウム「今も生きる伝統的人形芝居ー中国浙江省の指遣い人形ー」	平成 25 年 10 月 14 日	〈声〉とテキスト論
Daniel Breazeale 教授, George di Giovanni 教授講演会	平成 25 年 11 月 24 日	世界の視点をめぐる思想史的研究
国際シンポジウム「Zu der Forschung der Frühzeit des deutschen Idealisms」	平成 25 年 11 月 27 日	世界の視点をめぐる思想史的研究
公開研究会「「栽種」の道ー『吾妻鏡（ウチジン）』と明治日本の開化セクソロジー」	平成 25 年 11 月 30 日	19 世紀学研究
国際シンポジウム「戦時期の日本の東南アジア進出をめぐって」	平成 26 年 1 月 25 日	環東アジア地域のネットワークに関する総合的研究
学術講演会「越境する思想・異郷者の詩ー声と知のトランスレーションへ」	平成 26 年 3 月 10 日	〈声〉とテキスト論／19 世紀学研究
学術講演会「第二次安倍政権の教育改革と日本における文化的記憶の形成について」	平成 26 年 3 月 13 日	19 世紀学研究
学術講演会「流動化する建築物ー構築物となるイメージ（空間・知覚・流動）」	平成 26 年 3 月 27 日	19 世紀学研究
国際シンポジウム Philosophie des Geistes und Psychologie um 1800	平成 26 年 9 月 27～28 日	世界の視点をめぐる思想史的研究
国際シンポジウム「ハイデガー、テオリアと翻訳の使命」	平成 26 年 11 月 26 日	世界の視点をめぐる思想史的研究
国際シンポジウム「知の饗宴（インテレクチュアル・バンケットールネサンスから初期近代にいたるヨーロッパ思想の水脈）」	平成 26 年 12 月 19 日	19 世紀学研究／世界の視点をめぐる思想史的研究
国際シンポジウム「環東アジア地域から見た隋唐帝国：一次史料と地域から考える」	平成 27 年 2 月 18 日	環東アジア地域のネットワークに関する総合的研究
国際シンポジウム「叙情詩と（声）」	平成 27 年 3 月 10 日	〈声〉とテキスト論
公開講演会「シベリアの民族・言語・文化」	平成 27 年 4 月 22 日	言語類型の記述的・理論的研究
国際シンポジウム「後漢・魏晋簡牘研究の現在」	平成 27 年 9 月 20 日	環東アジア地域のネットワークに関する総合的研究
国際ワークショップ「東北アジア研究の現状と将来」	平成 27 年 11 月 25 日	環東アジア地域のネットワークに関する総合的研究
キリル・モシユコウ講演会	平成 28 年 1 月 8 日	〈声〉とテキスト論

(注) 出典：『人文科学研究』第 129, 131, 134, 135 輯の「人文学部研究プロジェクト短信」欄ほか

付表2 国際シンポジウム・ワークショップ等の開催状況（その他学部教員が主催に加わったもの）

名称	開催年月日	主催者等
国際ワークショップ「湖南省出土魏晉簡牘をめぐる諸問題」	平成24年2月19日	科学研究費補助金基盤研究(A) 「出土資料群のデータベース化とそれを用いた中国古代史上の基層社会に関する多面的分析」 (代表：關尾史郎)
国際ワークショップ「出土資料からみた魏晉時代の河西」	平成24年2月20日	科学研究費補助金基盤研究(A) 「出土資料群のデータベース化とそれを用いた中国古代史上の基層社会に関する多面的分析」 (代表：關尾史郎)
日仏啓蒙・百科全書研究集会・ジャンルイジ・ゴッジ先生を囲んで	平成24年9月29日	逸見龍生
国際シンポジウム「ディドロと化学的思考：フランソワ・ペパン先生を迎えて」	平成25年3月9日	逸見龍生、『百科全書』・啓蒙研究会
国際シンポジウム「18世紀ヨーロッパ精神史：アン・トムソン先生を迎えて」	平成26年3月14日	逸見龍生、『百科全書』・啓蒙研究会
国際シンポジウム「ポスト福島第一原発事故における地域コミュニティの持続的「発展」「再生」の可能性―日韓比較研究―」 (於延世大学)	平成26年10月17日	トヨタ財団助成研究(代表：渡邊登)
ジャック・デリダ没後10年シンポジウム	平成26年11月22～24日	文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「近代日本の人文学と東アジア文化圏―東アジアにおける人文学の危機と再生」
国際シンポジウム「『百科全書』における哲学」	平成27年2月21～22日	逸見龍生(『百科全書』・啓蒙研究会)、フランソワ・ペパン(リヨン高等師範学校古典思想史研究所)
「『百科全書』・『王立科学アカデミー紀要』研究」国際研究集会	平成27年2月23日	逸見龍生(『百科全書』・啓蒙研究会)、フランソワ・ペパン(リヨン高等師範学校古典思想史研究所)
ジャンニ・パガニーニ学術講演会	平成27年3月15日	逸見龍生、『百科全書』・啓蒙研究会
ワークショップ「ゴジラと戦後日本の原子核エネルギー」	平成27年5月22日	科研費補助金基盤研究(C)「東京と南洋を往還する帝国の残映とゴジラ映画史50年の比較文化史」 (代表：猪俣賢司)
XIVeme Congres de la Societe Internationale d'Etude du XVIIIeme siecle (SIEDS)	平成27年7月30日	逸見龍生
Colloque international, L'Encyclopedie et l'Histoire de l'Academie Royale des sciences de Paris	平成28年3月23日	逸見龍生